
シスター！

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シスター！

【Zコード】

N4752S

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

絶世の美姫と名高いグリーンヒル伯爵家の末の令嬢が修道院に駆けこんだ。彼女に恋い焦がれる若者たちが悲嘆に暮れるなか、とある見習い修道女はとんでもない秘密に頭を抱えていた……。女子修道院でくり広げられる、いろいろおかしい青春ラブコメディ。【不定期更新】

プロローグ 彼女たちの事情（1）

ディツセルヘルム公国で、グリーンヒル伯爵家の令嬢を知らぬ者はいない。

現当主の伯爵には四人の娘がいる。いずれも美姫と名高い伯爵夫人の血を色濃く受け継ぎ、社交界の薔薇と称えられる見目麗しい乙女だつた。特に長女のマリアーヌは、とある貴族が催した仮面舞踏会にお忍びで参加されていた大公殿下とそうとは知らずに恋に落ち、のちに大公妃として見初められるといつおどぎ話のような逸話で有名だ。

次女のイリシャは ファルスの霜剣 と謳われる騎士の名家・エンドル伯爵家に嫁ぎ、三女のヴィアンカは宰相の孫で国立大学の教授を務める若き博士との婚約が決まつてゐる。伯爵家の繁栄を謳うような縁談をだれもが羨み、そして人々の関心は、ひとり残つた末娘をいつたい何処いすこの貴公子が射止めるのかということだった。

四女のフレデリケは十五歳。まさに今、咲き初めようとする黄薔薇のこととき少女であつた。薄緑ががつた金の巻き毛に縁取られた頬は白く、彼女がそつと微笑むたびに薔薇色に色づいた。伏し目がちな双眸は不思議な金の光沢を湛え、潤むようなまなざしは見る者すべての心をとろけさせる。桃色の唇から小鳥がさえずるような声が紡がれるたび、微かな息遣いすら聞き逃すまいとだれもが耳を澄ませた。清楚なドレスに隠された華奢な肢体、その甘い柔肌をどれほど男たちが夜の夢に見たことだろう。

高嶺の花といえど未だ手折られることなく、悩ましげに匂うはだれも知らぬ蜜の香り。この甘美な事実は公国中の若者を熱狂させ、伯爵家の屋敷には連日連夜、恋文と贈りものが山のように届けられた。

求婚者には貴族の子弟ばかりでなく、大商人の跡取り、地方の有力者の息子、はては国外からも我こそはと名乗りを上げる者もいた。

幸運の花婿に選ばれる殿方はさていかにと、公都ブランシリウムの下町では賭事が流行る始末だった。やんごとなき殿上人から市井の民草まで、國中の人々が注目するなか 事件は起きた。

とある男爵の三男坊がフレデリケに恋い焦がれるあまり、夜這いをかけたのである。男性のみに権力が許されたこの時代、女性の貞節、特に未婚の乙女の純潔はとかく重要視された。たとえ一方的な暴力の末であつたとしても、一度肌を許してしまえば、それは女性側の落ち度とされた。淫売の烙印から逃れ、女の名誉を守る手段はただひとつ。

それは、清らかな花を散らした男との結婚だつた。

たとえ婚前であつても、夫となる者との交わりであれば罪にはならない。つまり既成事実を作つてしまえば、どんな身分の男でも意中の娘を手にすることができたのである。

貴族とは名ばかりの家柄に生まれ、家督すら継げぬ冷飯食いに残された、暴挙に等しい手段だつた。しかし恋情に狂つた若者を止められるものがあるはずもなく、彼は一世一代の大勝負に挑んだ。

結果をいえば、彼の失敗に終わった。

募る想いのあまり、末娘に不埒な真似をしてかす不届き者の出現を伯爵夫妻は危ぶんでいた。次女の嫁ぎ先であるエンデル伯爵家に依頼し、警護の騎士たちを早々に借り受けていたのである。

夜陰に乘じて屋敷に忍びこむことには成功したものの、フレデリケの寝所に近づくことすら叶わぬうちに発見され、あえなく御用となつた。

この出来事は瞬く間に公都を席巻し、人々を驚かせた。フレデリケの無事を喜びつつ、しかし哀れな青年に同情を寄せる者も少なくはなかつた。『罪深きはその美しさ。嗚呼、君はなんと無慈悲なのだろう』などという揶揄めいた恋歌が城下に流れ、いつまでも答えを出さぬフレデリケに苛立ちの声が上がりはじめていた。

そのひと月後、再びブランシリウムの都に衝撃が走る。フレデリケが、修道院に駆けこんだのだ。

女性が修道院に入るとはすなわち、髪を切り、神の花嫁たる修道女になることに他ならない。つまり彼女はすべての求婚を突っぱね、生涯未婚であることを宣言したのである。

これには求婚者ばかりでなく、フレデリケの両親や姉たちも多いに困惑した。

フレデリケが立てこもる修道院に通い詰め、なんとか説得を試みるもの、彼女はうんともすんとも口を開かない。修道院側も簡単に受け入れるわけにもいかず、艶やかな金翠の髪はそのままであつたが、それもまた時間の問題だった。

このままフレデリケは、本当に触れてはならぬ禁断の花になつてしまふのか。彼女に想いを寄せる男たちは悲嘆に暮れ、人々は美しき令嬢の悲劇に心を痛めた。

それから更に、ひと月の時が流れた。

プロローグ 彼女たちの事情（2）

マーニヤはありふれた人生を歩んできた娘だった。

貧しい農家の次女に生まれ、両手の指でも数え足りないほどの弟妹に囲まれて育つた。父は末の弟が生まれて間もなく流行り病に倒れ、あっけなく死んでしまった。未だ手のかかる幼子を何人も抱え、残された母は途方に暮れた。

家計を助けるために兄は公都まで出稼ぎに行き、姉は家事と内職をこなしながら弟妹たちの面倒を見た。母も必死に畠を耕したが、それでも育ち盛りの子どもたちを養っていくには厳しかった。

日に日に憔悴していく母や姉にマーニヤは訴えた。　あたしを売つてちょうだいと。

母は怒り、姉は泣いた。だが口減らしに娘や幼い子どもを売るなど、マーニヤたちの周囲では決して珍しいことではなかった。そうしなければ生きていけないほどの現実が、故郷にはあった。

それでも母がだれひとり我が子を手放そうとしなかったのは、きっとマーニヤたちを愛していたからだ。マーニヤも家族を愛していたからこそ、その思いを裏切ると決めた。

気立てのいい姉には、いくつかの縁談があった。そのうちのひとつは、姉が密かに想いを寄せる幼なじみからの求婚だった。彼は無口だがとても働き者で、マーニヤや弟妹たちのことも不器用ながらにかわいがってくれた。だから姉に身を売らせる真似など、決してさせたくなかつた。

何日も何日も話し合い、ときには口論し、とうとうマーニヤは母と姉を説き伏せた。ただし身売りではなく、修道院へ入るという条件つきで。

それではただ食い扶持が減るだけだと叫ぶマーニヤに、母は頑としてして譲らなかつた。我が子を卖つた金で生き延びるくらいなら死んだほうがましだといつ脅しのような懇願に、マーニヤは頷くし

かなかつた。

十四歳の春、マーニャは故郷の村をあとにした。

母も姉も泣いていた。いつもいたずらばかりしてマーニャを困らせていました。一番目の弟も、マーニャがどこに行くのか知らない三番目の妹も、見送りにきてくれた兄代わりの幼なじみはむつりと黙りこみ、母の腕に抱かれた末の弟だけがあどけなく笑っていた。さよならは言わなかつた。ただ、元気でね と。

マーニャは兄を頼つて公都を目指した。たまたま公都に行商へ行くという氣のいい商人の馬車に乗せてもらい、最初で最後の短い旅は穏やかに過ぎた。

公都で迎てくれた兄は何も言わず、一度だけマーニャの頭を撫でた。修道院へ行く前にどこでも案内してやると言つてくれたが、マーニャは首を横に振つた。小さい頃のように兄に手を引かれ、マーニャは公都で最も古い修道院の門を叩いた。

別れのとき、兄はマーニャを抱きしめ、声を立てずに泣いた。マーニャがはじめて見た、兄の涙だつた。

マーニャを迎えてくれたのは、灰色のベールに白い髪を隠した老境の修道院長だつた。彼女は気難しそうな細い目でじつくりとマーニャを見つめたあと、こう言つた。

「あなたは年若く、この世の喜びといつものを知らぬままここへやつてきたように感じられます。ここは神への愛と祈りだけを胸に抱いて生きる場所。あなたはその心を、神に捧げることを誓えますか？」

マーニャは濃い鳶色の瞳を瞬かせ、素直に首を傾げた。

「わかりません。あたしは今まで神さまとは縁遠い場所にいたから、神さまがどんな人なのかよく知りません。愛せるかどうかなんて、その人を知らない限りだれにもわからないと思います」

「よろしい」

院長はひとつ頷き、思いがけず優しく微笑んだ。

「あなたはここで、心ゆくまで神を知る努力をなさい。そしてあな

たの神を得たとき、もう一度答えを聞きましょう」

「あたしの……神さま？」

「そうです。あなたが生涯の愛を捧げるにふさわしい、尊い存在を見出すのです」

いつもして、マーニャは見習い修道女となつた。

正式な修道女になるためには、最低でも一年の修行を経なければならぬ。俗世への未練を断ち、信仰の道を歩めるのか もつといえど、娯楽も贅沢も許されず、質素で変化のない修道院の生活になじめるかどうか見定める期間が必要なのだ。見習いの間は髪を切らず、身に纏うのは深い青のベールと尼僧服である。

青いベールの下、いつもどおり肩を覆うアーモンド色の髪を見たとき、マーニャは知らず知らずのうちに張り詰めていた心がほつとゆるんだのを感じた。同時に、ほろりとこぼれた涙がひと粒、静かに頬を濡らした。

それはきっと、少女がようやく自分に許した「悲しい」という思いだつた。

自分の境遇が特別でもなんでもないことマーニャは知つてゐる。この世にありふれた、平凡な娘なのだと。

だから嘆く必要はない。憐れむ必要はない。

たつたひと晩の涙が、マーニャの最後のわがままだつた。

喜ばしいことに、修道院での暮らしはマーニャにとって苦ではなくかつた。自ら鍬を振るつて畑を作ることはもちろん、冷たい石壁に囲まれた部屋で寝起きすることも、味気ないパンとスープだけの食事にも、貧困のなかで育つた村娘は慣れっこだつた。

確かに娛樂はないに等しかつたが、知識や教養を身につけることは奨励されていたので、修道院にはすばらしい書物がいくつもあつた。マーニャは院長や先輩の修道女たちに読み書きを教えてもらい、巨大な書庫の蔵書を片つ端から読み漁つた。薄っぺらな紙の上に連なる文字の塊は、しかしマーニャにどこまでも広く深い世界を見せてくれた。

朝と夕の祈りの時間には、家族の健康と幸福を願った。そのたびに思い浮かぶのは、微笑んで花婿に寄り添う美しい姉の晴れ姿だつた。

静かな時の流れに身を浸していると、故郷に残してきた何もかも、いつしか心から剥がれ落ちていくような気がした。すべてを失ったときこそ、マーニャは迷いとともに髪を断ち切ることができるのだろ。

そうやつて名もなき修道女のひとりになるのだと ありふれた人生が続していくのだと、思っていた。

第一話 見習い修道女の受難（1）

聖ベルティアナ修道院は、公都ブランショリウムで唯一の歴史と伝統を誇る女子修道院である。

初代大公の妹姫であつた聖ベルティアナによつて開かれ、代々大公家に縁のある貴婦人が院長を務めている。そのため、この修道院で終生誓願を立てた修道女たちのなかには良家の令嬢や夫人であつた者が数多くおり、聖ベルティアナ修道院は高貴な女性たちの駆けこみ寺としても有名だった。

その修道院の聖堂に、ひとりの少女の姿があつた。天地の王アケロンと暁の聖母 シエライーデ、そして 星の御使い ラキエルの聖像が安置された祭壇の前に跪き、両手を固く握り合わせてじっと俯いている。小柄な瘦身を包むのは、見習い修道女であることを表す青色のベールと尼僧服。どこか幼さを残す横顔には深い苦惱が影を落とし、彼女をまるで嘆きの淵で祈りを捧げる聖女のよう見せていた。

そう、少女は悩んでいた。切実なまでに悩んでいた。

「神さま、聖母さま、御使いさま……」

黒目がちな鳶色の瞳ですがるよつて祭壇を見上げ、少女は途方に暮れた声で問い合わせた。

「あたしはいつたいどうしたらいいんでしょうか？」

しかし冷たい石像は何も答えてはくれず、静かなまなざしを少女に注ぐだけだった。

今すぐ奇跡が起きて、全知全能の神様がすべてを解決してくれればいいのに。思い浮かんだ虚しい願望に、少女は頃垂れてため息を落とした。

折れてしまいそうなその背中へ、不意に金の鈴を振るつような声が投げかけられた。

「まあ、マーマーヤつたらこんなところにいらしたのねー。」

思わず飛び上がった少女 マーニャは、おそれおそれ背後を振り返った。

「ずっとあなたを探していたのよ。一緒にお皿を召し上がりましょうねって約束しましたのに」

そんな覚えなんてありませんっ！ とマーニャは心のなかで絶叫したが、それを口にする勇気はなかつた。

青ざめて硬直したマーニャの様子などかまわず、声の主はかわいらしく微笑みながら近づいてくる。その後ろで、唯一の出入り口である扉が大きな音を立てて閉まった。

「本当にあなたは意地悪でつれない方ですわ。こんなにもわたくしが

祭壇上の薔薇窓から射しこむ七色の光が、その清艶な美貌を照らし出す。

金翠に煙る豊かな睫毛、その奥から見つめてくる蜂蜜色の瞳は背筋が震えるほど蠱惑的だ。肌は陶器のように白く滑らかで、だとうのに笑みを浮かべる唇は濡れた果実よりも瑞々しくふっくらしている。マーニャと同じ見習い修道女の装束を身につけているが、その細さは貧しさゆえのものではなく、洗練された美しさだった。視線を逸らすことすらできないマーニャの目の前までやってくると、絶世の麗人は身をかがめ、鼻先が触れるよつた距離でしゃべった。

「仲良くしたいと語りてこるのに」

甘美なアルトに、マーニャは心底怖氣立つた。

「フフ、フ、フレデリケさま……お、お顔が近いです」

「まあ、わたくしのことばリデルと呼んでくださいと何度も語っていますよう?」

「リ、リデルさま、あの、お願いですから離れて、ください……」

「リデル、ですわ。それにそんな言葉遣いをされたら、わたくし悲しくて悲しくてせつかくのお願いも聞けませんわよ」

じりじりと迫ってくる美貌に祭壇の下まで追い詰められたマーニ

ヤは、とうとう涙目になつて叫んだ。

「わかつたからどいてええ、リデル　！」

「いいよ」

掌を返したようにフレデリケはあつさうと身を離した。マーニャはぐつたりと崩れ落する。

「本当に失礼だなあ、マーニャは。ひと月も同じ部屋で暮らしてゐる相手の顔をまだ見慣れないなんて」

フレデリケはへたりこんだマーニャの傍らに腰を下ろすと、慣れな仕種で胡座をかいだ。スカートの裾が盛大にめくれたが、気に留めず顎になつた膝の上に頬杖をつく。

「そ、そういうことは鏡を見てから言こなさいよ……！」

恨めしく睨んでやると、なぜかにっこりと笑みが返ってきた。

「褒め言葉だと思つてありがたくいただくよ」

「褒めてない！」

この見てくれだけは天使か女神かといつよつな少年の名を、フレデリケ・エリアス・グリーンヒルといつ。この国で知らぬ者などいない時の人、栄えあるグリーンヒル伯爵家の末娘　もとい、末息子である。

公國中の若者たちが焦がれてやまない麗しの伯爵令嬢が、実は男だったなどと……いつたいだれが想像するだらう?

マーニャは偶然にもこの事実を知ったとき、あまりの衝撃にめまいを覚えるどころか気を失つてしまつた。夢から覚めると、骨の髓までとろけるような微笑を湛えたフレデリケが添い寝をしていたといふことのほうが更におそろしかつたが。

「ところで、一時間も聖堂にこもつて何をお祈りしてたんだい？」

ふと変わつたフレデリケの聲音に、マーニャはまくべつと肩を強張らせた。

「何を、つて……」

「ずいぶん深刻そうな様子だつたね。『あたしはだつしたらいいん

でしょうか？『なんて言つてたし

「聞いてたの！？』

フレデリケはつゝそつと金色の瞳を細め、マーニャの顔を覗きこんだ。

「ねえマーニャ、何か悩んでることがあるなら力になるよ。あみと僕の仲じゃないか

「別に、悩みなんか……」

「それともまさか僕との『約束』を破る気でも起こしたわけじやないよね？」

口元はこのうえなく優しく微笑んだのに、フレデリケのまなざしへマーニャの心臓を氷漬けにした。

フレデリケの秘密を知っているのは、この修道院のなかで同室のマーニャだけだ。それゆえ彼女はフレデリケの共犯者になることを脅され もとい、約束させられていた。

マーニャは壊れたからくり人形のようにがくがくと首を縦に振つた。

「そつか……それならいいんだ

ふつとフレデリケは表情をゆるめると、珊瑚色の爪が並んだ指先でマーニャの頬に触れた。羽が掠めるような愛撫にて、マーニャの鼓動が激しく鳴り響く。

「それにかわいいマーニャと離れ離れにならぬのは、とてもさびしいもの」

フレデリケはぐすりと少く笑つて立ち上がつた。ぼつと顔を赤らめたマーニャに手を差しのべる。

「そろそろ行かないと昼食抜きになつちやつよ。今日の食事当番は

口づむきシスター・アーリラだから

「そっ、そうね

マーニャは一瞬ためらっておそれおそるフレデリケの手を取つた。優しくマーニャを立ち上がらせてくれた彼は、まるで紳士のようだつた。

「ああ、やつだ。きみの洗濯ものが乾いてたから取りこんでおいたよ」

「へ……？」

奇妙にどきどきしてこの胸に 느낌でいたマーニャは、一瞬なんのことを言われたのかわからなかつた。

確かに、洗つた着替えや下着を朝食の前に干しておいたが 下

着？

フレデリケは実に爽やかな笑顔でのたまつた。

「マーニャってば、ずいぶんかわいい下着を穿いてるんだね」

「……い、いやああ っ！」

昼下がりの聖堂に、哀れな少女の悲鳴が響き渡つた。

結局ふたりは昼食を食べ損ね、腹の虫を鳴らしながら午後の修行に励む羽目になるのだが、それはまた別の話である。

第一話 見習い修道女の受難（2）

時は、まだ公都が雪のドレスを纏っていた黒の第一月（ゾルテ・アーノ）まで遡る。

その日、朝の祈りを終えたマーニャは、朝食のあとに院長室まで来るよう呼び出しを受けていた。春に控えている正式な修道女になるための終生誓願についての話かと考えたが、先輩修道女たちは「違う違う」と訳知り顔で首を横に振った。

「きっと例の方のことよ」

「今この修道院にいる見習い修道女はあなただけだもの。もうすぐ終生誓願を迎えるほどの経験者なら、新入りのお日付役にはぴったりでしょう？」

聖ベルティアナ修道院にグリーンヒル伯爵家の末の令嬢が供もつけずにやってきたのは、つい先日のことだった。公国中の若者を虜にした美姫の噂は修道女たちの間でも持ちきりだ。しかし当の令嬢は院長の許に隔離され、未だその美貌を拝した者はいない。彼女の存在を公にするということは、見習い修道女としての受け入れが決まったのだ。

先輩たちのなんとも厄介な予言に憂鬱になりながら、マーニャは院長室の扉を叩いた。

「どうぞ、お入りなさい」

「失礼します」

厳格そうな院長の声に招かれるまま扉を開けると、仄かな花の芳香が鼻をくすぐった。

マーニャは目を瞬かせた。

院長室は執務用の大きな書きもの机と椅子、整然と書物が並んだ書架ほどしか調度品のない、殺風景な部屋だった。院長は書きもの机に就いており、その前にひとりの少女が立っていた。

その姿を認めた瞬間、まるで光り輝く花がふわりと咲いたよ

うだつた。

ほつそりとした体を薄い青のドレスに包んだ少女は、目が合つた瞬間、見たこともない金色の瞳をそっと細めて笑つた。

ああ　あれば、故郷の朝焼けの空の色だ。

「シスター・マーニャ、どうぞ入つてらっしゃい」

言葉を忘れて立ち戻へすマーニャに、院長の静かな呼びかけが我を取り戻せた。

「あつ、す、すみません！」

慌てて部屋の中に入ったものの、少女のそばに行くことがひどく不謹慎なように感じられて、マーニャは扉の前から進めなかつた。院長の眉間に険しい皺が寄つたが、叱責が飛ぶよりも早く少女が動いていた。

「シスター・マーニャ？」

窺うような声音は、少女にしては低く、しかし澄みきつていた。ドレスよりも濃い色のリボンで高く結い上げた金翠の髪が頬を撫で、マーニャはすぐ田の前に少女がいることに息を呑んだ。

「はじめまして、わたくしはフレデリケ・エリアス・グリーンビルと申します。あなたと同じ見習い修道女としてお世話になることになりました。……どうぞよろしくね、マーニャ」

「あ、の……」、「こちらこそ、よろしくお願ひします」

少女　フレデリケのどこまでも美しい微笑に、マーニャは熱を出したように頬が火照つていいくを感じた。

立ち振舞いは楚々としていたながら、フレデリケは匂い立つような色気を纏っていた。くらくらとめまいがするような艶やかさは、確かに國中の男たちが恋い焦がれずにはいられないはずだ。

「……あなたも噂は存じているでしょ。こちらのレディ・フレデリケは我が修道院に入ることを望まれ、見習いとして修行していただけことになりました。シスター・マーニャは彼女と同室になつて、ここでの暮らしを助けてあげなさい」

「えつ、あ、ど、同室ですか！？」

「何か問題でも？」

一
いえ

修道女たちのほとんどはふたり部屋で寝起きしている。見習い修道女はマーニャだけだったため、今までひとりで部屋を使っていたが、そこに新しくフレデリケが入ることは妥当だろう。

しかし……こんな美少女と朝から晩まで過ごしていたら、心静かにしていられる自信などまったくない。

いやとはいえ、しかし快く籠過^{くのへ}ることも出来ない。ハニカムも「も」も「」と意味もなく口を動かした。すると、驚くほど血すべりかな手に両手を包みこまれる。

「う、えつー?」

わたくしはあなたのそばにいて
わたくしの顔など見たくない?
はいけないのかしら」

「そ、そんな」とは、「

「けれど、わたくしと同じ部屋で暮らす」「なぜ」やなのでしょう。「いや」とかじやなくて!　あ、あなたがすぐきれいだから、ど、ど、どうようして

しじみもじみになりながら必死に説明すると、フレデリケはひと
つ瞬き、ふつ と吐息のような笑みを洩らした。

「…………あなたはとてもかわいらしい方ね、シスター・マー二ニヤ」

「わたくし、あなたのことが好きになれそう」

なせたが、笑みの色を深める黄金の瞳はとても美しいのに、まるで舌なめずりする獣の前に差し出されたようなおそれしさに、ぞくりと背筋が粟立つた。

魁入られたよ」は目を逸らせずにしんど
うですね」と、院長の声にハツと我に返る。

「シスター・マーニャは、レティ シスター・フレデリケを部屋まで案内してあげなさい。用意ができたら聖堂のほうまで来るよう

に。そこで改めて皆にあなたのことを紹介いたします。よろしいですか、シスター・フレデリケ」

「はい、ありがとうございます。院長様^{マザ-}」

フレデリケはにっこりと微笑み、院長に向かつて優雅な一礼を返した。院長はしばしふフレデリケを見つめていたが、どこか呆れたような口調で言った。

「あなたはシスター・マーニャとはまた違つた意味で素直な方のようですが、あまり行きすぎた振舞いはしないように。特にシスター・マーニャは、この修道院で最も修道女らしい修道女ですから、いつたい何を指しての忠告なのかマーニャにはわからなかつたが、フレデリケはくつと口端を持ち上げてみせた。

「……肝に銘じておきますわ」

第一話 見習い修道女の受難（3）

院長室をあとにすると、ビリと疲労感が押し寄せてきた。
深々とため息をつきたい思いを堪え、マーニヤはフレデリケに向
き直った。

「それじゃあ、お部屋のほうに案内します。新しい尼僧服はそこ
でお渡ししますね」

「ねえ、マーニヤ」

「……なんでしようか、シスター・フレデリケ」

いつの間にか『シスター』が取れていた呼びかけに、ひどくいや
な予感を覚えた。

「わたくしのことはリデルと呼んでくださいな。家族や親しい方に
はそう呼ばれていましたの」

「そ、それは駄目です。修道院の中では、お互に『シスター』つ
て呼び合つのが規則なんですから」

「ええ、ですからふたりつきりのときだけ。わたくしとあなただけ
の秘密ですわ」

唇に人差し指を当てていたずらっぽく笑うフレデリケに、マーニ
ヤはふらつと倒れなくなつた。

やつぱりあたしには無理です、院長さま！

泣きながら院長室に逃げ戻りたい心地で、それでも踏ん張つて首
を横に振る。

「それにあなたは貴族でしょう？ 平民の出のあたしには、とても
畏れ多くてできません！」

すると、フレデリケはなんとも悲しげに頭を伏せた。

「わたくし、修道院というのはとても平等な場所だと聞いていまし
た。神の御許では生まれの貴賤などなく、だれもがひとりの人でし
かない……それは間違いだったのでしょうか？」

「そ、それは……そうですけど」

「それに　わたくしは、あなたとお友達になりたいのです
マー二ヤはばちぱちと田を瞬かせた。

「と、友達ですか？」

「ええ、そうですわ。俗世を捨てる覚悟でここに参りましたけれど
……本当は、とても心細いのです」

憂いに濡れたフレデリケの言葉に、胸の奥にじくじくと小さな痛み
が走った。

いつの間にか忘れていた　だが今もどこかに残る、幼い郷愁。
「同じ年頃の、同じく修道女を志す者として、お互に支え合つて
いきたい。そう思つては……いけませんか？」

そつと両手を取られ、潤んだ瞳が雨のなかに打ち捨てられた仔犬
のように見つめてくる。マー二ヤは赤面しながらなんとか言葉を探
した。

「い、いけなくなんてないです！　でも、規則は守つてもらわない
と困るから……」

「……マー二ヤはとても真面目なのですね」

フレデリケは咳くような声で笑つた。

「でも、わたくしとお友達にはなつていただけるのですね？」

「その……あたしも仲良くなれたらいいなつて、思います」

マー二ヤとて人嫌いなわけではない。好意を示されれば嬉しいし、
よりよい人間関係を築きたいと思つてゐる。だが『友達』という響
きがなんとも恥ずかしくて、ぼそぼそと俯きがちに答えることし
かできなかつた。

「うふふ、マー二ヤは本当にかわいらしいのね」

いつたい自分のどこを気に入ったのかが、フレデリケは楽しそう
な笑顔で「かわいい」を連発した。おかげで部屋に着く頃には、マー
二ヤはすっかり茹で上がつて肩で息をしていくようだつた。

「フ、フレデリケさま、あたしで遊んでもせんか！？」

「まあ、心外ですね。わたくしは正直な感想を口にしているまでで
してよ？」

嘘だ、絶対に嘘だ。わざとらしく目を瞠るフレデリケを、マーニヤは恨めしい気持ちで睨んだ。

見習い修道女の部屋は、修道女たちが暮らす僧坊の北の端に位置する。まるで独房のように狭く薄暗い室内には、中央に目隠し用の衝立が置かれ、壁の両際に簡素な寝台と衣装櫃がひとつずつあるだけだった。小さな明かり取りの下、聖家族を描いたタペストリーが慰めのようにひつそりと飾られている。

「ここが見習いの部屋です。一番暗くて寒い場所で暮らすことでも、修道女になるための修行の一貫だってそれでます」

マーニヤは説明しながら、こつそりフレデリケの様子を窺った。広大な屋敷で美術品のような調度に囲まれて生活してきた令嬢にはたしてこの光景は受け入れられるのか心配だった。

フレデリケはしばし無言で部屋の中を見回していたが、なんでもないような口調で訊いてきた。

「寝台がふたつありますけれど、わたくしはどうやらを使えばよろしくて？」

「えっ……と、あの、右のほうを

「わかりましたわ。着替えや荷物は衣装櫃にしまえばよろしいのかしら」

「あ、はい、身の回りのものはなるべくそこへ収まるべらうがいいと思います」

「まさしく『清貧たれ』ということですね」

余裕たっぷりに微笑むフレデリケに、マーニヤはほつと胸を撫で下ろした。

さつそくフレデリケに尼僧服を渡し、衝立の反対側で着替えてもらひ。襟の詰まつたドレスをひとりで脱ぐのは大変そうに思えたが、有無をいわぬ笑顔で手伝いを断られてしまった。貴族の娘ならば使用人に身の回りのすべてを任せることが当然のはずだが、フレデリケはそうではなかつたようだ。

「大きさは大丈夫ですか？」

「ええ、ぴつたり。ドレスよりも動きやすいですね」

衣擦れの音を聞きながら待っていると、頭髪を隠すベールを渡しそびれていたことに気づいた。マーニャは慌てて衝立の向こうを覗いた。

「ごめんなさい、あたしつたらベールを……」

差し出したベールが、するりと床に落ちた。

フレデリケは豊かな巻き毛を下ろし、尼僧服に袖を通した格好のまま硬直していた。青色の胸元は大きくはだけ、その下のまぶしい素肌を隠すものは何もなかつた。

真つ平らだ。

マーニャのそれも決して誇れるような大きさではないが、フレデリケの白い胸部は堅く、女の持つやわらかさやまろやかさというものを微塵も感じさせなかつた。意外なほどしつかりとした鎖骨の線、ドレスの襟に覆われていた喉元に浮かぶあれは……喉仏ではないだろうか？

マーニャはぺたんと床に座りこんだ。

「え……あ……え、え？」

ぱくぱくと口を動かすことしかできずにはいると、長く重いため息が聞こえた。

「まったく　僕としたことが、油断したよ」

フレデリケはそうぼやくと、氣だるげに髪を搔き上げた。その瞬間、目の前の人間を包む空気がからりと変わつた。

金色の瞳を眇める仕種はどこか鋭く、冷たい鋼に触れたようだつた。無邪氣で可憐な令嬢は消え、そこにいるのは、氣位の高い猫を思わせる世にも美しい　少年だつた。

「フレ、デリケ、さま？」

彼女、いや彼は……いつたいだれだ？

少年は膝を折ると、瞬きすら忘れてしまつたマーニャの頬をゆつ

くじと撫でた。薄紅色の唇を妖しく歪め、吐息を吹きこむように彼女の耳元でささやく。

「まつたくいけない子だね……マーニャは」

「どうなお仕置きをしてあげようか？」

痺れるような甘く冷たい声が、マーニャの限界だった。

ふつりと糸が切れたように目の前が暗くなる。倒れかけた体をだれかの腕が抱き止めてくれた刹那、彼女は意識を失った。

これが平穏の終わりであり悩める受難のはじまりだと、マーニャはまだ知る由もなかつた。

第一話 伯爵令嬢の秘密（1）

フレデリケ・ヒリアス・グリーンヒルは、グリーンヒル伯爵家に待望の男の子として生まれた。

伯爵夫妻はすでに三人の娘に恵まれていたが、長らく跡取りとなる息子を授かることが叶わなかった。当時、グリーンヒル伯爵ウィルバーートは四十八歳、夫人のパミーラは四十一歳ともう若くはなく、第四子の妊娠はふたりにとって最後の希望だった。普段は温厚で沈着なウイルバーートが男児誕生を知らされた瞬間、拳を突き上げて歓喜を叫んだことは今でも伯爵家の語り草になっている。

伯爵家の子どもたちは、かつて“奇跡の青い薔薇”と謳われたパミーラの美貌を見事に受け継いでいた。フレデリケと名づけられた末っ子も姉たちに負けず劣らず、天使が舞い降りたような愛らしい男の子にすくすくと育つた。

両親である伯爵夫妻はもちろん、三人の姉も年離れた唯一の弟を目に入れても痛くないほどかわいがった。

しかし、彼女たちのフレデリケに対する情熱は、いたせか……かなり間違った方向に開花してしまった。

「物心ついた頃には女の子の格好が当たり前になつてたよ。姉上たちのおさがりなら山のようにあつたし、まあ着せ替え人形にはうつてつけだつたんだろうね」

伯爵家の末娘として育つたいきさつを、フレデリケはなんでもないような口調で打ち明けた。

そのあまりの気負いのなさに、マーニャは豆鉄砲を食らつた鳩の気持ちがよくわかった。

「……ええつと？」

「つまりね、最初はお遊びに過ぎなかつた女装が冗談でなくなるくらい似合つてたもんだから、気づいたらとんでもない評判になつてたんだよ。姉上たちもハマり出したらとことん凝り性だから、徹底

的に僕を磨き上げてさ。僕もかわいいとかきれいとか褒められるのはいやじゃなかつたから調子に乗つちゃつたんだよねえ」

あははと他人事のように笑うフレデリケに、マーニャはめまいと脱力感を覚えた。

あれから意識を取り戻した彼女を待つていたのは、「おはよう」とすばらしい笑顔で迎えてくれたフレデリケ（添い寝つき）という名の悪夢の続き……もとい、残酷な現実だつた。再び天国へ魂を飛ばしそうになつたマーニャを、しかし彼はみすみす逃がしはしなかつた。がつちりと肩を押さえこまれ、「僕の話を聞いてくれるよね？」と背筋が凍るような美声でささやかれたら、蒼白になつて首肯するしかない。

なぜか寝台の上で膝を突き合させた状態で、フレデリケは語りはじめた。誉れ高き伯爵家の若君が性別を偽らねばならぬ理由それは、「子どもの頃から女装を続けてたら、本当に女の子だつて思われるよになつちやつた」というものだつた。

「お、お父さまやお母さまは止めなかつたんですか？」

「母上は姉上たちと一緒になつて盛り上がりがつてよ。父上は当然いい顔しなかつたけど、あの人は母上の尻に敷かれつ放しだから」

今なお列国一の美女といわれる伯爵夫人は、なかなか気の強い女性らしい。並み居る恋敵を蹴散らし、口説きに口説いてパミーラを射止めたウイルバーートは、愛妻と彼女によく似た娘たちには頭が上がらないようだつた。

こうして止める者のいない『四人目の伯爵令嬢』の噂は公国中に広まり、フレデリケが年頃を迎えると数々の縁談が嵐のよう舞いこんだ。

若く美しい未婚の姫君、更に大公殿下の覚えもめでたき名家の秘蔵つ子ともなれば、だれもが望む良縁である。途切れることのない求婚者の列に、しかし伯爵家は大いに慌てた。

何しろ、当のフレデリケはれつきとした男なのだ。どれほど少女の姿をしていようと、彼は伯爵家の跡取りであり、嫁ぐのではなく

妻を娶らねばならない立場なのだから。

「訂正しようにも信じる人なんて、だれもいないし、本当のこと我が知られたら知られたで醜聞になるのは間違いないだろ？ どうしようか手をこまねいているうちに、とうとう夜這いをかけられちゃって」「あの…… たる男爵家の若君がつていう？」

「そうそう。これは本格的にまずいつことになつて、見かねた一番上の姉上^{じゆじやうじゆう}がご夫君の大公殿下に相談したんだよ」

大公殿下をはじめとする、一部の人々は、フレデリケの本来の性別を知っている。たいへんな愛妻家で知られる大公殿下は、弟の将来を憂えるマリアーヌの頼みに、ほどぼりが冷めるまで大公家縁の女子修道院にフレデリケを匿うことを探案した。

「男子禁制の修道院なら下心のある連中は近づけないし、何より修道女になるつていえばあきらめも早くつくだろうしね」

「このことを、院長さまは知つてゐるんですか？」

「知つてたら僕を受け入れると思う？」

逆に問い合わせられたマーニヤは、ふるふると首を横に振った。現在の院長であるマザー・アンゼリー・ネは大公殿下の伯母君に当たるそうだが、すでに家名を捨てた聖職者だ。厳格で敬虔な院長が俗世の出来事のために修道院の規律を破るとは思えない。

「だから修道院でこの秘密を知つてるのは…… マーニヤ、きみだけなんだよ」

不意に変わったフレデリケの声色に、マーニヤはささくれつと肩を強張らせた。

「まさかこんなにあつけなくバレちゃつなんて…… 本当に困つたなあ」

フレデリケは小首を傾げ、氣だるげに微笑んだ。悩ましいほど美しい笑みのなか、しかし金色の双眸は少しも笑っていない。

「もしも事が明るみになつたら、我が家だけじゃなくて大公殿下にも『迷惑がおかげすることになるんだ。せつかくの殿下のはからいを無駄にするなんて…… できると思うかい？』

「で、でも、嘘はよくないとthoughtします」

精いっぱいの勇気を振り絞つて反論すると、フレデリケはくつりと喉を鳴らした。

「なるほどね 確かに、きみは修道女らしい修道女だ」とん、と軽く肩を押されただけで、マーニャの視界はぐるっと反転した。

「え……？」

皿を皿黒をせていると、フレデリケが覆い被さるように顔を近づけてきた。ぎしり、と不吉に寝台が軋む。

「僕だつて世間を欺くのは心苦しいよ、マーニャ。でも神様は、たつた一時の嘘すら見逃してくれないのかい？」

「フ、フレデリケさま！？ どうぞいい」

「きみが『うん』って言つてくれたら」

フレデリケはひどく静かなまなざしで見下ろしてくれる。

「きみが神様の代わりに許してくれたら、どうてあげる」

「そんな、あたしなんて、ただの見習い修道女でしかありませんー！」

「でも 僕の懺悔を聞いてくれるのは、きみだけだ」

マーニャは思わず瞬いた。

少年の白い顔からは表情が抜け落ち、彼の胸の内を推し量ることは難しかった。だが、じつと外されぬ視線が、まるでさがつているように思えた。

出合つたばかりのマーニャには何もわからない。だが、唐突に思い出す 心細いのです、といつゝ言葉を。

「…………あたしは、何をすればいいんですか？」

気がつくと、そんな問いを口にしていた。

フレデリケは小さく目を瞠り、ふと口元をゆるめた。

「マーニャは優しいね」

やわらかな、まるで淡雪のような笑みに、胸の奥がきゅうつと痛んだ。

「僕がここを去るまで秘密を守つてほしい。ただ、それだけだよ

「それ……だけ？」

「うん。きみが秘密を守ってくれたら、僕も必ず嘘を告白する
マーニャは大きく息を吸いこみ 頷いた。

「約束です。神さまに誓つて」

フレデリケは、嬉しそうに笑つてみせた。

「約束だよ」

しかし、彼はいつのまにマーニャの上から退ひいてしまった。それ
どころか、いたずらっぽく瞳を輝かせながら頬を撫でてきた。

「あの、フレデリケさま？」

「うん？」

「約束したから、そろそろビtocてくれませんか？」

マーニャの懇願に、フレデリケはまつとまつと目を細めた。

「今更『氣づいたんだけど

「はい？」

「……修道女を組み敷くなんて、なかなか倒錯的でそそると思わない？」

「へへへー？」

耳元に投下された爆弾発言で、マーニャは声にならない悲鳴を上げた。

しかし、それを聞き届ける者は、だれもいなかつた。

第一話 伯爵令嬢の秘密（2）

そして時は再び現在に戻る。

季節は移ろい、冬の最後の月である黒の第三月（ゾルテ・スーリ）も終わろうとしていた。すっかり雪もまばらな中庭を窓の向こうに見やり、マーニャはため息をこぼさずにはいられなかつた。

このひと月を振り返ると、凄まじい羞恥に身悶えそうになる。初日ですっかり味を占めたフレデリケは、暇さえあればマーニャをからかうことに精を出し、彼女の反応を見て大いに楽しんでいた。まるで遊び盛りの仔猫の手中で転がされる鞠になつたような気分だ。甘いささやきや刺激的すぎる触れ合いに、いつたいて何度心臓が壊されかけたことだろうか。フレデリケと出会つてから、自分の寿命はおそらく削られているに違いない。

彼は、まるで蜜のように甘美な毒だ。

美しい花には棘があるというが、フレデリケがその微笑みの下に秘めているのは芳しい毒だ。魂まで蝕まれ、身を滅ぼされるとわかつっていても、心惹かれずにはいられない魔性の猛毒。

「シスター・マーニャ？」

淡々として呼びかけに、マーニャはハツと我に返つた。

傾きはじめた午後の陽が射しこむ書庫で、マーニャは先輩修道女のひとりから勉強を教わつてゐる最中だつた。いくつもの書架が迷路を作り上げてゐる書庫の奥には、長い机が並んだ閲覧室がある。ふたりはその一角で、広げた教本や筆記帳を挟んで向かい合つていた。

ちなみに、フレデリケは院長に呼び出されて席を外してゐる。

「何か気になることでも？」

「いっ、いいえ、すみません！ シスター・リュシア」

慌てるマーニャに長い睫毛を瞬かせたのは、明るい亞麻色の断髪を紫紺のベールで覆つた女性だった。

年の頃は二十代後半、水鳥のようによつそりとした首をわずかに傾げる様がなんとも優美だ。切れ長な双眸は、香り高い紅茶の色と揺るぎない静けさを湛えている。

シスター・リュシアは、年若いながらも一十年近くこの修道院で過ごしてきたという古株の修道女だ。院長からの信頼も篤い模範的な存在であり、マーニャも修道院に入つたばかりのときから何かと面倒を見もらつていた。

「珍しいですね、あなたが講義中によそ見をするなんて」

「すみません、ちょっとぼうっとしちゃいました……」

「いいのですよ。ちょうど切りのいいところでしたから、少し休憩しましょうか」

「そう言つと、シスター・リュシアは教本を閉じた。

「悩み事ですか？」

「えっ？」

「ずいぶん塞いでおられるようですから。何か、悩んでいらっしゃるのではないか？」

修道女の静謐なまなざしは、まるで心の奥底まで見通すよつて見つめてくる。

「悩んでいる、つていうか……」

「……シスター・フレデリケとのことですか？」

マーニャは椅子から飛び上がった。

「彼女とうまくいっていないのですか？」

「そ、そんなことは」

ありません、と言い切ることができず、思わず項垂れる。シスター・リュシアはわざかに目を細めた。

「シスター・フレデリケはたいへんお美しく聰明な方ですが、少々奔放で型破りなところがあるようですね。最近、シスター・アデリラは彼女のことばかり小言をこぼしていますもの」

「はあ……その、院長さまはあたしとは違つた意味で自分に素直な人だつて言つてました」

「……なるほど」

表情が薄い修道女の口元が苦笑氣味に綻んだ。じつやらシスター・リュシアには、院長の言葉に含まれた意味がわかつたらしく。

「確かにそのとおりですね。の方はご自分を偽る必要などまったくないのでしょう」

なんて羨ましい、と彼女はひつそりと呟いた。

マーニヤは鳶色の瞳を瞬かせた。

ああ、フレデリケが最初から偽りのなかで生きているのだと、本当にだれも知らないのだ。

自分の懺悔を聞いてくれるのはマーニヤだけだと、彼は言つていた。嘘をつき続けることを、神様の代わりに許してほしいと。

フレデリケの真実を知つてているのは、マーニヤだけだから。

「シスター・フレデリケは、あなたをとても慕つていらっしゃるようですね」

「え？」

「あなたと一緒にいらっしゃるときの彼女は、まるで好きな女の子にちよつかいをかける男の子のようですもの」

やんわりと微笑むシスター・リュシアの指摘に、マーニヤは火が点いたように赤面した。

……甘えられている、のだろうか。

もしもそうだとしたら いやではないと感じてこの人に気づき、ますます顔が熱くなる。

「……友達になってほしごって言つてくれたんです」

蚊が鳴くような声でマーニヤは打ち明けた。

「あたし、修道院に来て、もうそんな人はできないって思つてしまつた。院長さまやシスターたちがよくしてくれるけど……故郷にいた頃みたいな、対等で、なんでもない悩みでも言つて呟える友達はできないだろ?つって」

だから、と続けた言葉は、知らず震えていた。

「すごく……すごく、嬉しかったんですね」

差しのべられた手に救われたのは、きっとマーニャも同じだ。

何もかもあきらめていたはずの日々のなか、もう一度だけ神様が許してくれたわがまま。マーニャだけの、友達。

「……あなたにとつても、シスター・フレデリケはかけがえのない方なのですね」

シスター・リュシアの優しい声に、マーニャはなぜか泣きたい気持ちで頷いた。

「はい」

第一話 伯爵令嬢の秘密（3）

修道院の一日は、日没とともに終わる。

夜の訪れを告げる鐘の音が公都に響く頃、聖堂に集まつた修道女たちは一日の平穀と恵みを神に感謝し、祈りを捧げる。揃つて夕食を摂つたあとは、早々に各自の部屋へ引き上げるよう暗黙のうちに決められていた。再び太陽が目覚めれば、慌ただしく彼女たちの朝がやってくるからだ。

僧房の北の端に位置する見習い修道女の部屋からは、すでに灯が消えていた。明かり取りから射しこむ月影が青白く室内を照らしている。

薄い毛布にくるまつたマーニヤは、隙間から忍びこんでくる夜気に身を震わせた。春が近いとはいえ、夜は未だ冷える。手足の末端から凍りついでいくようで、毛布の中できゅっと縮こまつた。

まだ故郷にいた頃、こんな冬の夜はきょうだいたちと身を寄せ合つて眠つたものだ。ひとつ毛布を分かち合い、小さな弟妹たちを抱きしめて、あるいは兄や姉に抱きしめられながら北風のすすり泣く声をじっと聞いていた。

一度と触ることのないぬくもりが甦り、寒さがいつそうひどくなつた気がした。恋しさはやがてきりきりと胸を締めつける痛みに変わる。

脳裏に浮かぶのは、美しい故郷の春だつた。明るく澄み渡つた空、やわらかな翡翠色に染まつた野山。木々の枝先で丸々と膨らんだ薔薇ローズがいつせいに弾けると、村は花の帳に覆われる。

桜、杏、李サクラ、エド、リ……白い花びらが降り注ぐ道を、婚礼の衣裳を纏つた

姉が夫になる青年に手を引かれて歩いてくる。まるでふたりの門出を祝福するかのような花吹雪に、花嫁と花婿は幸せそうに微笑み合ひ、そして。

「……マーニヤ？」

衝立越しの呼びかけに、マーニャはハツと息を呑んだ。

「ど、どうしたの？」

「まだ起きているかと思つて……」

寝返りを打つたのか、微かに寝台が軋む音が聞こえてくる。衝立の向こうにフレデリケがいることを思い出し、体からほつと力が抜けた。

「今夜は特に冷えるね。手足が氷漬けになりそうだ」

「まだ黒の季節（ゾルテ・フィース）だもの。青の季節（アスル・フィース）がはじまれば、すぐあたたかくなるわ」

一年は十二の月から成り、それを更に四つの季節に分けてくる。青葉が茂る春は青の季節、太陽が燃え盛る夏は赤の季節（ロセ・フィース）、乾いた風が吹く秋は白の季節（フィーア・フィース）、そして暗闇に凍える冬は黒の季節　　といふやうだ。冬が終わり、青の第一月（アスル・イール）の一日から七日間を渡つて盛大に行われる迎春祭^{ヴェレンティア}を経て、新たな一年がはじまるのだ。

迎春祭が過ぎれば、マーニャは『最低でも一年』といふ見習い期間を終える。正式に修道女として髪を切る許しは、すでにマザー・アンゼリーネから貰つていた。

「これから迎春祭の準備で忙しくなるし、青の第一月まであつとう間よ」

マーニャは自分に言い聞かせるに応えた。そうだ。すぐに春はやつてきて、今度こそ胸の奥に眠る想いと決別するのだ。

一瞬、奇妙な沈黙が落ちる。フレデリケはため息をつくより眩^{ハリ}いた。

「……そうだね。そうかもしれない」

その声がひどくさびしげに聞こえ、マーニャは口をつぐんだ。ぎしづり、と反対側の寝台が鳴る。孤独を搔き立てるような寒さに彼も眠れないのだろうか。

「ねえマーニャ、あのシスターとどんな話をしてたんだい？」

「えつ」

「昼間、閲覧室で話しこんでただろう? シスター・リュシア、だけ」

いつの間に見られていたのだろう。シスター・リュシアとの会話を思い出し、かあつと頬が熱くなつた。

「何を……つて」

まるで好きな女の子にちよつかいをかける男の子のようだとか、あなたにとつてかけがえのない方なのですねとか、思い返せば転げ回りたくなるような指摘ばかりだ。マーニャは毛布に潜りこんで身悶えた。

「ななな、何も! ゼンゼン大したことなんて話してないわ!」

「……まったくそういう風に聞こえないんだけど」

「リデルが気にすることじやないわ! ええ、ちつとも、本当になんでもないから!..」

むしろお願いだから何も訊かないで! と涙目になりながら念じていると、ふとフレデリケの声が低くなつた。

「僕には言えないようなことなのかい?」

ぎくり、と反射的に体が固まつた。

衝立の向こうでひと際大きく寝台が軋んだ。微かな衣擦れのあと、ぺたぺたと乾いた足音が近づいてくる。

「シスター・リュシアには言えるのに、僕には何も話してくれないんだ?」

ぎこつと音を立てて沈んだのは、マーニャの寝台だった。すぐそばに腰かけたフレデリケの気配が毛布越しに迫つてくる。

心臓が口から飛び出してしまいそうで、とっさに両手で口元を覆つた。

「…………僕じゃ、なんの力にもなれないのかい?」

尋ねる声は怒っているようにも、拗ねているようにも思えた。

マーニャは瞬くと、おそるおそる毛布から頭を覗かせた。視界をフレデリケの形をした影が遮り、月明かりを灯した金色の双眸がじつと見下ろしていく。

ああ、きれいだなと、マーニャは状況も忘れて不思議な光に見とれた。

「……本当に、なんでもないの」

その輝きに惹かれるまま、マーニャはおずおずと打ち明けた。
「シスター・リュシアは修道院に入った頃からいろいろ面倒を見て
くれた人で……あたしがあなたと、その、うまくいっていないんじや
ないかって心配してくれたのよ」

「……ふーん」

いちだんと冷ややかなフレデリケの聲音に、慌てて釈明する。
「も、もちろんそんなことないって言つたわよ？ あなたとはぜん
ぜん性格も違うけど、一緒にいていやなわけじゃないし、それに

「

かけがえのない人。

シスター・リュシアの言葉がすとんと胸の真ん中に収まつた。
ああ、そうか フレデリケと過ごしたこのひと月を、本当は樂
しいと感じていたのだ。大切な、特別な時間だと。

知らず、マーニャは微笑んでいた。

「それに……あたしはリデルを、大事な友達だと思つてるから」
フレデリケの目が大きく見開かれた。
しばらくの間、ふたりは黙つて見つめ合つた。先に視線を逸らし
たのは フレデリケだつた。

「僕は、きみの……『友達』なんだ？」

「リデルが友達になりたいって言つてくれて、あたし、嬉しかった
の」

マーニャは万感の思いをこめて言つたが、フレデリケの横顔は…
なぜか切なそうだった。

「……きみが喜んでくれたら、僕も嬉しいよ」

『まかすように小さく笑つたかと思うと、少年は不意に身をかが
めた。前髪越しに、まるで羽が掠めるような感触が額へ落ちる。』
硬直するマーニャに、立ち上がつたフレデリケは優しくさせやこ

た。

「おやすみ、マーニャ」

彼が衝立の奥に去つても、マーニャはしばらく動けなかつた。

額

を押さえ、いつたい何をされたのかと必死で考える。

フレデリケの顔が近づいて、その形のいい唇が 。

「……っ！？」

マーニャは言葉にならない悲鳴を上げた。

見頃の修道女たちの眠れぬ夜は、まだまだ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4752s/>

シスター！

2011年5月20日00時11分発行